

# カトリック宣教とエスニック教会： シアトル「殉教者の元后聖マリア」日系教会を事例として

糸井輝子

## はじめに

日本における在米日本人／日系アメリカ人<sup>1</sup>研究は、宗教の分野でも、この十年でめざましいものがある。とはいえ、キリスト教関連では、プロテスタント教団にかかわる研究がほとんどであり、カトリック教会に関するものはいぜんとして極めて少ない<sup>2</sup>。

しかし、カトリック教会がアメリカの日系人社会と何の関わりも持たなかったわけではない。日本語新聞を通覧すれば、カトリック関係の記事の多さにむしろ驚く。とくに注目されるのは、「メリノール (Maryknoll)」の活動である。カリフォルニア州ロサンゼルス市とワシントン州シアトル市には、メリノール宣教会と呼ばれるアメリカ・カトリック外国宣教会 (Catholic Foreign Mission Society of America) が日本人移民のための民族教会 (Japanese National Parish)<sup>3</sup>を設け、メリノール修道女会と協力し、

---

本稿は2008年度白百合女子大学研究奨励の成果報告である。

- 1 日本人は、1952年まではアメリカに帰化することができなかったので、日本人移民は日本国民である。一方、アメリカで生まれた日本人は、出生によってアメリカ市民権を得たので、日本国民であるとともにアメリカ市民 (日系アメリカ人) でもある。しかし、本稿では煩雑さを避けるため、日本人移民および日系アメリカ人を、総称して、日系人と呼ぶ。英語では、Japanese という言葉が、日本国民にも日系アメリカ市民にも、区別なく使われていることが多く、英語史料を使う場合には、日系人と総称した方が便利でもある。
- 2 研究動向および論文に関しては移民研究会編『日本の移民研究 動向と文献目録』(明石書店、2008年) 参照。
- 3 後にフィリピン人への宣教も司教は依頼する。フィリピン系人、日系人対象のエスニック教会となるが、Japanese [National] Parish とも呼ばれていたことが物語るように、主には日系人の教会であった。

幼稚園と学校を付設していた。その学校関係記事が多い。メリノール修道女会に入ろうとする二世の記事<sup>4</sup>も散見される。また修道女の訪日の記事も扱いが大きい。第二次大戦中の日系人強制立退・収容時には、メリノールの神父が提唱する自由移動計画も、大々的に報道されている。この計画は頓挫したが、強制収容所には「白人」のメリノールの神父や修道士、修道女も暮らしていた。しかしこれらの活動に関しては、ほとんど研究対象になることはなかった。近年になって、ようやくアメリカのカトリック関連のウェブサイトと言及がみられるようになった程度である<sup>5</sup>。

本稿では、カトリック教会が日系人社会に対してどのような活動を行ったのかについて、ワシントン州シアトル市に、Japanese National Parish (日系人教会) として開かれた「殉教者の元后聖マリア教会 (Our Lady Queen of Martyrs Parish 以後 ULQM 教会と略記する)」を、事例として紹介する。おもにシアトル市大司教区文書館史料<sup>6</sup>、イリノイ州クウィンシー大学図書館所蔵ティベサ神父文書<sup>7</sup>、東京メリノール宣教会資料<sup>8</sup>に依

4 1941年11月27日の『北米時事』は、ヘレン・康代・ナカガワがメリノール学校出身者としてはじめてメリノール修道院に入る、と報じている。彼女は、戦後、四日市で宣教活動を行った。RG700: Parishes, Our Lady Queen of Martyrs, “Historical.” 日系二世が神父となるは戦後である。

5 本稿に近いテーマに、Madeline Duntley, “Seattle’s Japanese–American Catholics 1920 1950: Asian Integration and the Impact of Internment”がある(クウィンシー大学ティベサ文書所蔵)。アジア人教区としてなぜ存続できなかったのか、日系とフィリピン系および教会との関係を扱っている。出版年不明。おそらくは学会で口頭発表された原稿である可能性が高い。なお彼女には“Japanese and Filipino Together: the Transethnic Vision of Our Lady Queen of Martyrs Parish,” U.S. Catholic Historian (Winter, 2000) vol. 18, No. 1, 74 98 もある。日本語文献では、伊藤一男『北米百年桜』(日貿出版、1973年)「チベサー神父とマシューズ牧師」；小岩健夫編『チベサー師のごととも』(元后会、1968年)がある。

6 RG 記号が付された史料はすべて the Archives of the Catholic Archdiocese of Seattle の閲覧許可による。引用はすべて筆者訳。

7 “Tibesar Japanese Collection” at Brenner Library, Quincy University. 引用はすべて筆者訳。おそらく弟の Seraphin Tibesar が学長となった関係で、文書が寄贈・保管されたのであろう。彼のメリノール宣教師としての満州、ロサンゼルス、シアトル、戦後日本での活動の記録として充実している。

8 James P. Colligan, M.M., “Maryknoll and Japan, Dec. 7, 1941 to Dec. 31, 1948.” タイプ原稿。

拠して、OLQM 教会の設立と終焉までを日系人社会との関連から概観する。そして

1. なぜ日系人に特化した教会がシアトル市に設けられたのか、
  2. なぜ「白人」神父が、本来居住が許可されなかったはずの強制収容所に、日系人とともに暮らしたのか、
  3. なぜ日系人を特定した教会が戦後解体したのか、
- について説明する。

### 1) カトリック日系人教会の誕生

シアトル司教区で、最初の日系カトリック教徒の集会が開かれたのは、シアトル大司教区文書館史料によれば、1916年10月30日であった。場所はピーター・コンドーの私宅であったが、シアトル司教エドワード・J・オデイ (Edward J. O'Dea) が会を主宰した。この会は、ロサンゼルスから日本へ戻る途中、シアトルに数日滞在したブレトン (Albert Breton) 神父<sup>9</sup>の働きかけで開かれたという。神父はフランスから派遣されて日本宣教を行っていたが、日本語能力を買われ、ロサンゼルスの日系人に宣教し

9 Fr. Albert Breton (1882 1954年パリ外国宣教会) は、ハリー・ホンダの作成したアメリカ日系人カトリック年表によれば、1905年に青森県で宣教を始めた。1912年、郵送での悔悛の許可を求めた日系人のために、函館司教によってロサンゼルスに派遣され、1921年までロサンゼルスを拠点に西海岸で司牧 / 宣教活動を行った。1916年にシアトルに寄ったのも、そうした活動の一環であったのであろう。1919年に日本へ戻ることを希望し、ブレトン神父は、メリノール宣教会に活動の継続を依頼していたという。メリノール宣教会は、日本伝道の足がかりとであるというローマ教皇庁からの確約を得て、この申し出を受け入れた。なおハリー・ホンダは、メリノール小学校で教育を受けたカトリック信者で、長年日系アメリカ市民協会の機関紙 *Pacific Citizen* の編集長を務めた。2004年4月2日面接。なおウェブサイトは、“Of Japanese Catholics in America: Briefs and Timelines” available from <http://www.discovernikkei.org/nikkeialbum/en/node/5745>。2008年3月12日閲覧。ブレトン神父は、シアトル大司教区文書館史料によれば、後に Fujioka 司教になったとあるが、福岡の間違いであろう。RG700: Parishes, Our Lady Queen of Martyrs, “Historical.”

ていた。日本に戻り、日系人社会で宣教する日本人神父と修道女を探すことが、今回の渡日の目的であった。オディ司教もまた、ブレトン神父に、日本人の神父と修道女を日本で見つけて欲しいと依頼した。シアトル司教区の日系人への宣教と学校開設のためであった<sup>10</sup>。記録では司教からの依頼という形をとっているが、おそらくは、日系人宣教活動を行っていたブレトン神父の助言によるのではないだろうか<sup>11</sup>。

しかし日本人の神父らを見つけることはできなかったのであろう。1919年末までにブレトン神父は、1911年設立後10年足らずではあるが、日本や中国への宣教に関心のあったメリノール宣教会に、司教側の意向、そして自身の希望を打診していたと思われる。メリノール修道会総長ジェームズ・A. ウォルシュ (James A. Walsh) は、1920年の1月10日には、オディ司教に、確認の書簡を送っている。1月29日付けの書簡で、司教は、シアトル日系人社会が西海岸でも最大規模であり、宣教の成果が期待できると述べ、日系人社会への宣教と幼稚園運営に対する全面的協力を約束した。すでに幼稚園用地を探し始めており、園児の世話係の女性も一人は決めていた。司教にとって問題なのは、用地の確保や財源も不安材料であったろうが、それよりも問題であったのは、実際の宣教と教育の担い手である神父と修道女の確保であった。司教は「収穫は巨大であるが、働き手はほとんどいない」と書いている。日系人が幼稚園のような子供を安心して預けられる施設を熱望していたので、財源に関してはなんとかかなろうと楽観していたようにも思われる<sup>12</sup>。

10 この集会に長崎の隠れキリシタンの子孫が二家族参加していたのは興味深い。Rev. Juo F. Gibboney (Secretary of the meeting), "The First Meeting of Japanese Catholics in the Diocese of Seattle," undated. RG840: Religious Priest, Maryknoll Box 7.

11 From Bishop of Seattle to Very Rev. James A. Walsh, A.F.M, Supr., March 6, 1920 には日系人宣教の情報をブレトン神父から得たとある。RG840: Religious Priest, Maryknoll Box 7.

12 From Bishop of Seattle to Fr. James A. Walsh, Jan. 20, 1920. RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7.

表 1

	男	女
6歳以下	891	902
14歳以下	239	216
20歳以下	316	210
37歳以下	2277	1857
50歳以下	1558	336
50歳以上	200	64

在シヤトル帝国領事館 第1回国勢調査統計  
(大正9年10月1日現在)

表 2 カリフォルニア州日系出生数

年	出生数	年	出生数
1912	1467	1919	4458
1913	1215	1920	4971
1914	2874	1921	5475
1915	2342	1922	5066
1916	3721	1923	5010
1917	3108	1924	4481
1918	4218	1925	4408

『在米日本人史』1103 - 1104頁から作成

1920年のシアトル市の日系人口は、約1万人であった。表1<sup>13</sup>が示すように、圧倒的に壮年男性の多い社会であった。とはいえ、50歳以下から37歳までの男女比と、37歳から20歳までの男女比とを比較し、6歳以下(男891、女902)と14歳以下6歳まで(男139、女216)の人口数と男女比率を考慮すると、若年層はアメリカ出生者で、出生数が急増しているのが読み取れる。実際、カリフォルニア州の統計ではあるが、表2<sup>14</sup>の示すように日系人の出生数は、1910年代から21年のピーク時まで急増している。

13 「在シヤトル帝国領事館第一回国勢調査統計表(大正九年十月一日現在)」より作成。竹内幸次郎『米国西北部日本人移民史 下』([1929年]雄松堂 1994年) 826-828。

14 在米日本人会『在米日本人史』(在米日本人会 1940年) 1103-04。桑井輝子『外国人をめぐる社会史 近代アメリカと日本人移民』(雄山閣1995年) 172、図15も参照。

日系人家庭は通常共働きであったので、幼児を安心して預けられる施設を切望していた。しかも子供に「正しい」英語も教育してくれる施設は理想的であった。

こうした需要を見越して、司教は、急増する日系人への宣教の足がかりとして、日系人社会が必要とする幼稚園を開設することが急務であると確信していた。そのような積極的方針を打ち出したのは、少数ではあるが熱意ある日系カトリック信者の存在であり、彼らの信仰から判断して日系人宣教に将来性があると確信していたからであろう<sup>15</sup>。また、信者に対する日本語による司牧活動の必要性を認めたからであろう。

## 2) メリノール学校

ニューヨーク大司教パトリック・J・ヘイズ (Patrick Joseph Hayes) の許可を得て<sup>16</sup>、シアトル司教区に、メリノール修道女会から修道女2名、シスター・テレサ (Sr. Teresa Sullivan) とシスター・ジェマ (Sr. Gemma Shee) が派遣された。幼稚園は5月1日にスプルース通り (Spruce St.) 1000番地に開園した。園児は6名であった<sup>17</sup>。当初は月200ドル (一部を転貸するので48ドル) の賃貸であった<sup>18</sup>。やがて手狭になり、翌1922年、

15 From Bishop of Seattle to Very Rev. James A. Walsh, A.F.M, Supr., March 6, 1920. RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7.

16 From J. A. Walsh to Rt. Rev. Edward J. O'Dea, D.D., undated. RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7. 3月16日、ウォルシュ総長を通して、司教の依頼を受けたメリノール修道女会は、ニューヨーク大司教に正式の許可状を出してもらえよう、司教に依頼する書簡を送っている。From Sr. Mary Joseph Rogers to Rt. Rev. Edward J. O'Dea, March 16, 1920. 同上。

17 J. A. Walsh 神父の記録によれば、20名である。“Parish History,” April 10, 1945. RG700: Parishes, Our Lady Queen of Martyrs, “Historical.” また開園2日目は、16名であったと、1920年7月発行の *The Field Afar* は伝えている。5月30日の式典には、日本領事館からも領事代理が派遣され、100名を超える列席者が式場から溢れたという。また、2名の修道女に加え、2名の日系人女性が幼稚園の運営にあたった。

18 From Robert J. Cairns to Rt. Rev. Edward J. O'Dea, D.D., Mar. 29, 1920. RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7.

17街507番地に移転する。園児数は84名となり、まもなく100名を超えた。孤児院も開かれた（1935年閉園、託児所となる）。バス通学という児童向けサービスの他、成人向けにカトリック教育も始められた。教会にメリノール宣教会神父が主任司祭として常駐するようになったのは、1924年であった。翌1925年、日系人のための OLMQ 教会が設立された。やがて同じ東洋人として、フィリピン系人も対象となる。まもなく、児童の成長とともに、1926年には学校を開設した。なお日曜学校は当初から開かれ、参加者は1927年には127名を数えた。近隣のホワイト・リバー・バレー地区でも、日曜学校は開校されるようになった。1928年には、日曜日のミサには常に250名が出席し、うち116名が受礼したカトリックだったという。最初の卒業式は1933年に行われた。5名であった<sup>19</sup>。

このように宣教活動や学校運営も、表面的には発展した。日系人学童年齢人口は、表2が示唆するように、急増の後、すぐに急落する。それにもかかわらず、「メリノール学校」は順調に学童数を増やし、1934年には177名に達し、1936 - 37年には203名となる<sup>20</sup>。1930年2月17日には、シアトル司教オディおよびシアトル領事岡本季正が出席し、教会と幼稚園および学校を一体化した新校舎の起工式が行われた。建設費65,000ドルを要した大きな建物であった。L字型で、玄関には日本の屋根があり、丸窓にはメ

19 1921年、17番街507番地に移転する。このときには、女子修道院には病院で働く3名を加え、9名の修道女が居住していた。やがて学校を開設する時は12名を数えた。“Maryknoll School History,” undated. RG700, Parishes, Our Lady Queen of Martyrs, “Historical”; from James A. Walsh to Rt. Rev. Edward J. O’Dea, D.D., Nov. 9, 1928. RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7. なお、ここにはメリノール女子修道会があり、そのレターヘッドには、Convent of the Maryknoll Sisters (Japanese Catholic Mission) とある。RG900: Women Religious, “Maryknoll Sisters of St. Dominic Correspondence Vol. [1920 1952].”

20 “Maryknoll School History,” undated. RG700: Parishes, Our Lady Queen of Martyrs, “Historical.”

リノールの紋章がついていた<sup>21</sup>。幼稚園は2歳半から5歳まで70名を収容し、学校は8年生までの教育であった。孤児院には32名を収容した。この年、日曜学校の出席者は300名、うち145名は過去2年間の回心者であった<sup>22</sup>。

「メリノール学校」では、1934年の広告<sup>23</sup>によれば、幼稚園は満3歳半から、学校は1年から8年まで、教育を行った。その後も学業を続けたい場合には、公立のハイスクールやカトリックのオディ・ハイスクール、その後はカトリック系のシアトル大学等に進学することになる<sup>24</sup>。「育育にのみ偏しない所謂人間教育の根底を築き上げ」こと、「同一校内にて日米両国の教育を授く」ことが特色だ、と明言されている。日本語は第2学年から教えられ、「文部省発行の教科書にて日本語を教授す」とある。極めて特異である。

ワシントン州の各地の「国語学校」は、排日運動に配慮して、日系人をアメリカ市民として教育するための、公立学校教育の「補習校」であると公言していた。その教育方針を明示するために、文部省編纂の国定教科書は、アメリカ市民の教育には相応しくないとして退け、米国北西部連絡日

21 From Bishop of Seattle to Rt. Rev. Msgr. Eugene J. McGuinness (Executive Secretary A.B.C.M.), May 22, 1931. この書簡に添付されている“The Catholic Japanese Mission of Seattle”には、建設にあたってAmerican Board of Catholic Mission から6万ドルの援助があったことが示されている。RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7. しかし、この後の年次報告の会計項目などから考えると、建設費の6万ドル近い借金が残っており、利子払いは大きな負担となっている。6万ドルというのは、借入されたものではないかという疑問が残る。“Diocese of Seattle Annual Report of the Parish of Queen of Martyrs as Seattle Wash, and Missions,” 1930-1942. RG700: Parishes Parish Annual Report.

22 同上。1931年5月22日付けシアトル司教からの書簡は、あきらかに、日系人とフィリピン系人への宣教活動が順調であることを示す意図を持っている。

23 1934年初秋に掲載された『北米時事』の広告による。

24 Autobiography of Father Tibesar, 17. タイプ原稿。おそらくは、草稿として残されたいくつかの断片が整理統合され、タイプ打ちされたものであろう。草稿は、Quincy University, Tibesar Japanese Collection, Box 4, vol. 8のなかに散在している。

本人会教育委員会が独自に編纂した「国語教科書」を日本語教育に用いていた。よりよい市民を育成するためには日本語教育が必要であると主張し、その一方で、現地の日系人と日本人会が設立と維持に深く関与していたのである<sup>25</sup>。

一方、「メリノール学校」は補習校ではなく、公立学校に代わる「教区学校」である。「メリノール学校」は、1934年末の外務省による日本語学校調査によれば、シアトル領事館内の日本語学校リストには記載されていない<sup>26</sup>。「国語学校」とは一線を画す存在であった。しかし、日本国民教育の色彩の強い文部省教科書を使っていた。日本人としての意識を明確に持つべきであるという意図があったのか、それとも日本語教材として、国定教書の方がよいと判断したのであろうか。シアトル日本領事館とも友好関係を保つなど、教育、外交の面からも興味深い。なお、その他の特色として、広告は剣道とスポーツ奨励を謳っている。

前述したように、オディ司教は当初楽観的な見通しをもっていたようであるが、メリノール宣教会総長 J. A. ウォルシュとオディ司教との往復書簡や、1930年代の会務報告を見る限り、運営は赤字続きであった<sup>27</sup>。シアトルの日系社会は、ロサンゼルスほどには人口もなく、財力がない。また白人側からの資金援助も望めなかった。とくに日本が満州に、そして中国への侵攻していった1930年代には、反日感情が強まり、不況も重なって、一般白人社会からの援助は望み得なかったであろう。1930年代、アメリカ

25 日本語教育と教科書編纂に関しては、“‘The Twain Shall Meet’ in the Nisei? Japanese Language Education and U.S. Japan Relations, 1900-1940,” in Lane Ryo Hirabayashi, Akemi Kikumura Yano, and James Hirabayashi eds., *New Worlds, New Lives: Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan* (Stanford, CA: Stanford University Press, 2002), 108-125 参照。

26 外交史料館「日本語学校調査一件」 150-17。

27 “Diocese of Seattle Annual Report of the Parish of Queen of Martyrs at Seattle Wash., and Missions” 1930-1942. RG700: Parishes Parish Annual Reports.

世論の同情は中国にあり、メリノール本部も例外ではなかった。シアトルのメリノールは、本部から見れば「継子」のような存在であり、日系人への宣教活動には、偏見とまではいえなくとも関心はない、と1935年からOLQM教会の主任司祭を務めた神父は懸念していた<sup>28</sup>。建設・運営資金を得るために、国内伝道局 (Home Mission Board)、あるいは全米カトリック福祉協議会 (National Catholic Welfare Council) に援助を求めた。とくに American Board of Catholic Mission からは恒常的な援助を得た<sup>29</sup>。また、オディ司教も援助していた<sup>30</sup>。それでも、「メリノール学校」と教会の運営は、財政的には自立からはほど遠かった<sup>31</sup>。神父自身が穴埋めすることもあった<sup>32</sup>。負担の大きい学校運営を続けたのは、「それこそが彼ら

28 Bishop Shaughnessy, "Parochial Episcopal Visitation," April 26, 1938. RG700: Parishes, Our Lady Queen of Martyrs, "Correspondence General, Vol. [1930 42]."

29 From J. Walsh to Rt. Rev. Edward J. O'Dea, Aug. 14, 1926, & March 13, 1929. N.C.W.C からは6000ドルがフィリピン系人と日系人のための活動に援助されている。また国内伝道局からも、1930年10月に2000ドルなど、定期的な援助を得ている。From G. E. Hayes to Rev. John. C. Murrett, M.M., Oct. 4, 1930. 新校舎と教会の建設にはアメリカンボードからの多額の援助があった。ボードからは毎年援助が行われた。From Hugh Lavery to Rt. Rev. Monsignor Noonan, April 18, 1933. RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7. 1938年の司教訪問報告によれば、2000ドルがボードから提供されている。"Parochial Episcopal Visitation," April 26, 1938. RG700: Parishes Our Lady Queen of Martyrs Correspondence General Vol. [1930 1942].

30 シアトルメリノール宣教会からの書簡によれば、1000ドルが援助されている。文面には "again" とあるので、過去にも何らかの援助があったと思われる。From John J. Toom to Rt. Rev. and dear Bishop (O'Dea), May 28, 1930. RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7. "Japanese Catholic Mission, Seattle" (Nov. 8, 1933) によれば、過去13年間、司教区からの援助はまったくないという。もしこの記述が事実なら、司教区からでなく、司教から援助があったことになる。なお、アメリカンボードからの援助は13000ドルにのぼるといふ。RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7.

31 From Hugh Lavery to Most Rev. Gerald Shaughnessy, Feb. 4, 1934. RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7.

32 "Japanese Catholic Mission, Seattle," Nov. 8, 1933. 署名はない。しかし、1933年の主任司祭は Hugh Lavery であることを考えると、おそらくこの報告を書いた筆者は Lavery であろう。執筆者は、12年前に海外伝道のために用意した950ドル、母親から援助された数百ドルを借金の利子支払いのために用立てている。RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7.

[日系人]の心を捉え、信仰を勝ち得る主たる手段」だからであった<sup>33</sup>。  
神父もまた、「[西]海岸宣教活動は外国宣教の手本となり、宣教精神の活性化に役立つ」ことを、メリノール宣教会創設者ウォルシュ総長が望んでいたことだと記している<sup>34</sup>。

「メリノール学校」は「収穫」を得つつあった。ジョン・C・ミュレット (John C. Murrett) 主任司祭によれば、開園当初9ヶ月、日曜日のミサに参加したのはごく少数の園児だけであった。やがて、園児の両親が加わり、親の友人等も参加するようになった。あるとき、妻の葬式の出せない移民に代わって、シアトル聖堂教区の聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会が葬儀を執り行ったことがあった。その行為に、多くに日系人が感激し、ある人は僧職を離れてカトリックに改宗し、同会の活動を日本人移民のあいだに組織するまでになったという<sup>35</sup>。シスターになろうとする二世も現れた。ヘレン・康代・ナカガワは、シスターになって、神と人ともに生涯を捧げようと決意した。その動機を、彼女は、シスターたちの日々の働く姿であったと、『北米時事』の記者に語っている。病気で欠席した時に見舞いに来てくれるシスター、神の愛を語るシスター、授業するシスター、日系人を見舞うシスター、「黙々と働き続けるシスターの姿」、すなわち「シアトル同胞間に於けるメリノール・シスター達の献身的犠牲の生涯其のもの姿である」と記事は結んでいる<sup>36</sup>。シスターたちは、教育と家庭訪問という日常活動の積み重ねを通して、生徒に感銘を与え、宣教に結実させていたといえよう。後に神父は、「教会と学校のすばらしい連携」と評価している。ツツジや桜を植栽し、池やテニスコートもあった。日系人の学

33 同上。

34 L. H. Tibesar, M.M., to Fr. Dougherty, March 4, 1937. RG840: Religious Priest, Maryknoll, Box 7.

35 Fr. John C. Murrett, M.M. "Maryknoll in Seattle," *The Field Afar*, Feb. 1933. RG700: Parishes, Our Lady Queen of Martyrs, "Historical."

36 『北米時事』1941年11月27日。

校として申し分のない環境だったと思われる<sup>37</sup>。

## 強制立退と収容

日本軍の真珠湾攻撃の後、12月12日、シアトル司教ジェラルド・ショーネシー (Gerald Shaughnessy) は、司教教書を発した。聖書のさまざまな箇所を引用して、隣人愛と寛容がカトリック精神であると強調した。言動や思想において、「事実であれ、想像上であれ、国籍、信条、人種、あるいは肌の色の違いで差別をしたり、侮蔑したりしてはならない」、と諭した。とくに日系人への対応に関して1段落を割り、「日本人の血をひくアメリカ市民」は「他の人びとに劣らず忠誠であり、他の人びとに等しく真のアメリカ市民権を要求する権利をもち、それゆえ市民としての諸権利をもち、キリストにおける吾等の同情と愛を必要とし...反感や偏見の無実な犠牲者である」、と説明した。そして、「カトリックの伝統」は「特別な博愛の絆で彼らを抱擁することを諄々と諭している」、と注意を喚起した。また敵国人となった「我が国に居住する法を守る日本国民」についても言及して、「救い主」の教えに違わず、寛容と隣人愛で接するように求めた<sup>38</sup>。開戦後間もないころに、このような声明を信者に向けて発し、その後の、人権派も巻き込んだ集団ヒステリー的状況のなかでも、一貫して日系人に同情を示し続けたことは、記録されるべきであろう<sup>39</sup>。長年の信者と教会との信頼関係のなせる結果であったといえよう。

開戦後、OLQM 教会の礼拝にはこれまでにない数の人びとが集まった

37 “Autobiography”, 15.

38 Catholic Northwest Progress. 現在は Archdiocese of Seattle のホームページで閲覧できる。http://www.seattlearch.org/ 2008年9月28日閲覧。

39 ショーネシー司教は、1942年7月11日のメモの中で、政府の日系人政策に反カトリック的思想はないとしながらも、「多くの破壊的なプロテスタントの白人牧師が問題を起こしているように思われる」と記している。RG1200: Apologetics “Japanese, Relations with Correspondence Vol. 1.”

という。信者、非信者を問わず、ティベサ神父に助言を求めたのであった。<sup>40</sup>シアトルの日系アメリカ市民協会も、神父に今後の活動方針と具体的対応の助言を求めた。日系人のあいだには、立退きに抗議活動を提案する者もあったが、神父は、そうした活動は逆効果で、今は流れに逆らわない方がよいと助言した<sup>41</sup>。

やがて大統領令9066号による日系人の強制立退命令で、日系人はシアトル郊外のピュアラップ共進会場に強制移動させられることになった。1942年4月24日、「メリノール学校」は第10回、そして最後となる卒業式を、シアトル司教ショーネシー臨席のもとに挙行した。託児所はその後しばらく、中国系人やフィリピン系人のために開かれていた（1943年9月閉鎖）が、学校は27日に閉鎖し、再開されることはなかった。OLQM教会は、フィリピン系の教会として存続し、ジョン・F・ウォルシュ神父が主任司祭となった。ティベサ神父は日系人に同行し、仮収容所のあるピュアラップに赴いた。仮収容所内の居住許可は下りなかったが、仮収容所は、ピュアラップ教会から数ブロックにあり、ティベサ神父等はその司祭館に宿泊し、毎日、仮収容所内で、できる時にできる場所でミサを執り行った。かなりの非カトリック信者も参加した<sup>42</sup>。

やがて日系人はさらに内陸の、ミネドカ収容所に移動することになる。シアトル司教ショーネシーは、ティベサ神父らが日系人に同行してミネドカ収容所に行くことに許可を与え、全面的な支援を約束した。そして、アメリカンボードやボイスの司教に協力を要請した<sup>43</sup>。シアトル司教は、

40 ジェームズ・坂本「シアトルのメリノール」小岩健夫編『チベサー師のことども』(元后会、1968年) 26-28。

41 Autobiography, 21.

42 From L. H. Tibesar, M.M., to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, Aug. 5, 1942. RG700: Parishes Our Lady Queen of Martyrs Correspondence General Vol. [1930-1942].

43 From General Shaughnessy, S.M., to Rev. L. Tibesar, M.M., Aug. 6, 1942. 同上。

終始一貫、強制立退・収容を遺憾に思い、日系人に対する同情を示していた<sup>44</sup>。司教は7月25日にピュアラップ仮収容所で行われた堅信礼に出席し、説教を行っている<sup>45</sup>。

公的には、ティベサ神父は、日系人ではなく、政府係官でもないので、ミネドカ収容所には居住できなかった。そこで彼は、公的には存在しないことで、居住した。彼は人望があり、カトリック信者をはじめとする多くの日系人から頼られていたのであろう。しかし彼の側にもカトリック宣教者としての危機感もあった。「プロテスタントには収容された日系人の牧師がおり、礼拝が必ず行える」<sup>46</sup>のに対して、カトリックでは日系人の神父は皆無であり、メリノールの聖職者が居住しなければ、カトリックの宣教活動は停止してしまう。信仰が確立していない人びとは、カトリックから離れてしまう恐れがあろう。また教育においても、もしメリノールの修道女が担わなければ、公立学校教育だけとなろう。神父の側はこのように恐れた。メリノール宣教会総長補佐ジェームズ・M. ドラウトも、メリノールの聖職者が教育と宗教活動を提供すると申し出ているにもかかわらず、収容所当局がなんら方策も出さず、カトリック教育を選ぶ権利が無視されている現状を、シアトル司教に訴えている。ドラウト総長代理によれば、「転住所とは共同体というよりは強制収容所に近く、わがカトリックの人びとはその権利を奪われている」のであった。そして、司教の方針に協力

44 キリスト教会協議会のメンバーのなかには、日系人の立退に積極的であったものもあった。Charles N. Smith, "Memo to the Bishop," July 28, 1945. RG700: Parishes, Our Lady Queen of Martyrs, "Correspondence General, Vol. [1943 67]."

45 From Margaret Nakagawa to Most. Rev. Gerald Shaughnessy S.M., S.T.D, July 27, 1942. 日系人信者は、66ドル献金で集め、世話になったピュアラップ教会のパワー神父にお礼としたいと申し出ている。From James Y. Sakamoto to His Excellency Gerald Shaughnessy, Aug. 13, 1942. RG1200: Apologetics "Japanese, Relations with Correspondence Vol. 1."

46 From L. H. Tibesar, M.M. to Rev. J. T. O'Dowd, April 28, 1942. RG1200: Apologetics "Japanese, Relations with Correspondence Vol. 1."

するといえ、司教にさらなる善処を求めたのである<sup>47</sup>。

収容所では、当初はティベサ神父の部屋の隣室が、礼拝室兼図書室兼子供のクラブルームとなった。ヴィンセンシオ会員はカトリック新聞を配布し、病人を訪問し、非カトリック信者の家庭も訪問した。Legion of Mary は日曜ごとに60名の子供を教えた。神父のもとには、信者だけではなく、さまざまな相談者が集まった。夫の早期釈放を求める妻たち、収容所から出所するつてを求めて、進学や就職の斡旋を求める若者たち。家族内の葛藤を相談する親や子。とくに「忠誠登録」をめぐる葛藤は大きかった。天皇への忠誠を放棄するかという質問に関して、一世間に動揺が大きく、そうした質問をするのであれば市民権が与えられるべきだ、と神父はコメントしている。ジェームズ・サカモトラ、メリノールの青年の忠誠心に揺らぎはなかった、と神父は述べている。彼らから27名の若者が志願し、25名が入隊した。戦時中60名が入隊し、志願兵は半数を占めた。5名が戦死、20名が負傷した。彼らが置かれた状況を考えれば、志願したのは「英雄的」行為であり、ヨーロッパ戦線だけでなく、太平洋戦線でも語学兵としても勝利に多大な貢献を果たした、と神父は評価している<sup>48</sup>。

ティベサ神父は、WRA の再定住方針にのって、信者を中西部のカトリック社会に家族単位で、できれば集団で再定住させたかった。彼らはシアトルでは、「一生涯スラムに住み続ける」運命にあった。再定住はスラムからの脱出になると考えた<sup>49</sup>。また偏見の少ないカトリックの環境で暮らすことが、安全であり、安心であろうと考えたのである。実際、神父は、イ

47 From James M. Drought, M.M. to Most Rev. Gerald Shaughnessy, S.M., S.T.D., July 1, 1924. 同上。

48 From L. H. Tibesar, M.M. to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, Feb. 11 & June. 18, 1943, Oct. 1945. 同上。

49 From L. H. Tibesar, M.M. to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, undated. おそらくは1942年クリスマスか43年新年の頃。ミネドカ収容所、住所は 23 1 C となっている。RG700: Parishes, Our Lady Queen of Martyrs, "Correspondence General, Vol. [1943 67]."

リノイ州クインシー大学学長である実弟を仲介に、セントルイスに集団移住を企画した。結果的にはこの集団移住計画は頓挫したが、個別的には、カトリックの大学、教会、病院へ就職・進学を斡旋できた。インディアナ州のセント・メリー大学 (St. Mary' College) には約40名、デトロイトのマーシー病院 (Mercy Hospital) には20名が再定住した。総計1000名を数えたという<sup>50</sup>。

## 再定住

1944年12月18日、連邦最高裁判所は「忠誠な」人びとを強制収容することはできない、と判決した。翌年1月2日、西海岸への帰還制限が撤回された。ジョン・F・ウォルシュ主任司祭やティベサ神父の報告によれば、1945年7月までには約1000名が、10月には約3000名がシアトル司教区に戻っていた。収容前日系人が居住していた地区は、黒人が流入し、住居の確保は絶望的であった。自宅があったとしても、借り手が立ち退かず、戻ることができない場合もあった。仕事はあるが、彼らの技能や教育に見合うものは乏しかった。帰還した日系人に対して、あからさまな敵対行動は見られなかったが、人種間の緊張は感じられた。ウォルシュ主任司祭によれば、戦前教会を共有していたフィリピン系人は、日系人の帰還に憤りを感じているという。8月には、日系人は約75名が日曜日のミサに出席するようになった。やがて、日系人の数が増え、朝の10時半に加えて、9時にもミサが開かれるようになった。ティベサ神父によれば、非カトリック信者も十数名参加するようになった。ある仏教徒は、日系人社会は今ではメリノールにとても感謝している、と神父に語ったという。高齢者の方が改宗する見込みが高いと伝えている<sup>51</sup>。若い世代は、ニホンマチと呼ばれた戦前の

50 From L. H. Tibesar, M.M. to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, Oct. 1945. 同上。Autobiography, 23 24.

51 From John F. Walsh, M.M., to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, S.M., S.T.D., July 26 & Aug 4, 1945. From L. H. Tibesar, M.M. to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, Oct. 1945. 同上。

日系人居住区には戻らず、拡散していった。

ティベサ神父によれば、日系人は学校再開を当然視していたという。しかし、実現は困難であろうと神父は考えていた。日系人は、数も少なく、居住区が定まらず、しかも広範囲に拡散しているために、生徒を集めることそのものが難しい。幼稚園だけを再開し、学校の再開の可能性を見極めた方がよいであろう、と神父は慎重であった<sup>52</sup>。

住宅問題の解消のために、シアトル国語学校が帰還する日系人を受け入れるホステルに転用された。仏教会、プロテスタント教会のなかにもホステルを開くものがあつた。ジョン・F・ウォルシュ主任司祭は、メリノール学校の校舎を日系人のホステルに転用する提案を、7月までに、ニューヨークメリノール本部に打診している<sup>53</sup>。しかし、提案はメリノール本部の反対によって否決された。転用には大幅な改修が必要なこと、一箇所に日系人を集中して収容することは、反日感情を再燃させる懸念があること、が理由であった。本部は、「彼らを助けて、仕事を見つけさせ、落ち着いたら、その土地の教会に通わせ、その土地の教区学校に子供を通わせるよう、勧める」ように、とウォルシュ主任司祭に指示した。本部は、西海岸に帰還するのは心情的には理解しても、政策的にはティベサ神父の考えるように「誤って指導されている」と見なしていた<sup>54</sup>。最終判断は、現地の方を知るシアトル司教に委せたとはいえ、「人種隔離された集団」とし

52 From John F. Walsh, M.M., to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, S.M., S.T.D., Aug 4, 1945. From L. H. Tibesar, M.M. to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, Oct. 1945. コノリー大司教もまた、シアトル司教補佐の1948年にメリノール修道女会に同じ案を示唆しているが、結局、成功しなかった。From Thomas A. Connolly, Archbishop of Seattle to Most Rev. Amleto G. Cicognani, D.D., July 27, 1954. 同上。

53 From John F. Walsh, M.M., to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, S.M., S.T.D., July 26 & Aug 4, 1945. 同上。

54 From John F. Walsh, M.M., to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, S.M., S.T.D., Aug. 7, 1945. 同上。

て日系人に特化した学校と教会を維持するよりも、地元の教会と学校に通わせる方が、主流社会への同化が促進すると考えたからであった。もちろん、日系人が他地域でも人種偏見に直面することは予想されたが、最終的には、メリノール本部は、日系人に特化した宣教活動を停止する方針を打ち出したといえる<sup>55</sup>。こうした配慮の背後には、日系人の帰還に対して、教区を共有するフィリピン系人との不協和音がみられたからでもあろう。また、多くの黒人が「ニホンマチ」におり、黒人たちの必要性を満たすためもあったであろう。しかし、多くが、とくに大多数を占める二世が、かつてニホンマチと呼ばれた地域には戻らず（戻れず）、拡散したことが、日系教会の再建を物理的に阻む要因であったろう。戦前は、言語的制約もあり、日系人への特別な配慮が必要であった。しかし、言語的制約がなくなれば、日系人、あるいは日系人とフィリピン系人に特化したエスニック教会は、特別な宣教対象の教会から、「人種隔離された」教会へと転化する。戦後の公民権活動が盛んになって行けば、人種統合には逆行するとみる批判が強まるおそれがあったろう。

シアトル司教ショーネッシーはメリノール本部の方針に積極的ではなかったように思われる<sup>56</sup>。むしろ、日系、中国系、フィリピン系の、東洋人系教会（Oriental National Church）に発展させたい意向であった<sup>57</sup>。しかし、メリノール本部は、1946年5月27日、司教に宛てて、日曜日のミサは続けるとしても、学校は再開せず、福祉サービスを提供するに止め、校舎は司祭館とソーシャルセンター（Japanese Filipino Center）に転用し、現在の司祭館は託児所に転用したい、と提案した。「信者は、だんだんと、今の教会から離れ、もっとも〔住まいに〕近い教会に通うことに慣れるべ

55 From James E. Walsh to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, S.M., D.D., Oct. 24, 1945. 同上。

56 Memorandum by Bishop Shaughnessy, Oct. 8, 1945. 同上。

57 From Thomas A. Connolly, Archbishop of Seattle to Most Rev. Amleto G. Cicognani, D.D., July 27, 1954. 同上。

きであると考える」、と再確認している。ソーシャルセンターにフィリピンという文字を入れたのは、日系人の帰還で、フィリピン系人側が疎外されていると感じないようにする配慮だったという。中国系人には、特別な宣教的配慮は不要であろうとも触れている。

東洋人" と総称的に呼んでも、人種間の緊張があり、扱いの難しさを認識していたと窺える。その一方で、日本語のできるティベサ神父を主任司祭にする意図を伝えている<sup>58</sup>。すぐに東洋人に特化した教会の活動を停止するのではなかった。教会の歴史の持つ特殊性への配慮、自分たちの教会だという意識を持つ高齢の一世たちへの配慮であろう。

たしかに、日系人へ「海外宣教」に準じる宣教活動が開始され、維持されてきたのは、言語と差別の壁があったからである。ロサンゼルスで青果業を営み、子供をメリノール学校に通わせていた外川明は、強制収容所のなかで「英語の説教の分かりにくい事を遺憾に思つた」（1942年8月29日）し、神父ともっと宗教的に深い話をしたいのであるが、うまく思いが伝わらない（1943年7月11日）と日記に残している。

1946年8月、シアトルに戻ったティベサ神父は、幼稚園再開と社会的奉仕活動を修道女会に要請した。しかし、主任司祭はジェームズ・F・ウォルシュ神父であり、ティベサ神父は「コック」をした<sup>59</sup>。やがて彼は、「大きな機会が開かれている」日本へ派遣されることになる。後任には、ロサンゼルスでラヴェリ神父を助け、日系人宣教活動の経験のあるジョン・スウィフト（Swift）神父が主任司祭に任命された<sup>60</sup>。

その後も、OLQM 教会でのミサに高齢の一世は出席し続けた。1952年1月までに、OLQM 教会のハッガーティ主任司祭とメリノール本部は、今

58 From James E. Walsh to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, D.D., May 27, 1946. 同上。フィリピン系人への宣教は積極的ではなかった。

59 "Autobiography".

60 From R. A. Lane, Super General to Mt. Rev. Gerald Shaughnessy, Aug. 28, 1946. 同上。

後の方針を、現在の場所で、日系人だけを対象に活動を行うが、学校も幼稚園も再開しないことを確認している。メリノール修道女会も、4名の修道女を日系人への宣教活動にあてるつもりであった<sup>61</sup>。日系人に活動を限るとするのは、ハッガーティ神父の考えだと思われる<sup>62</sup>。しかし、翌年にメリノール修道女会は方針を転換する。修道女会は、1953年6月15日付けで、シアトルから1953年9月1日に撤退することを決定する旨、メリノール宣教会総長レイモンド・A・レーン (Raymond A. Lane) に通知した。二世世代は地元の教会に通い、ごく少数の高齢者だけが日系教会に通う現状では、「効果的な活動は望めない」というのが撤退の理由であった<sup>63</sup>。

修道女会の突然の撤退決定通知に、シアトル大司教は「驚愕」した。それは、「宣教活動には深刻な打撃」であった。彼女らの協力なしに、ハッガーティ神父の宣教活動計画は実現不可能であろう。修道女たちは、神父から活動計画を知らされておらず、自分たちの自発で活動してきたのであり、語学教室やアメリカ化教室などを開く意図はあっても、神父から指導も激励も受けていなかったと、大司教はメリノール宣教会総長に、率直に、指摘している。そして、教会施設が「有色の人びと」の「福祉センター」として活用されるのが望ましく、それは1951年9月の合意事項と合致すると確認した。大司教は、メリノール宣教会の神父のシアトルからの撤退は望んでいないと結んだ<sup>64</sup>。

修道女会の撤退は、メリノール宣教会総長にも、唐突な決定であった。

---

61 From Vicar General to Most Rev. Thomas A. Connolly, Jan. 9, 1952. 同上。

62 Memorandum to Fr. Power from Archbishop Connolly, Dec. 1, 1952. 同上。

63 To Fr. General, dated June 15, 1953. From Most. Rev. Raymond A. Lane, Superior General to Most. Rev. Thomas A. Connolly, June 23, 1953. 同上。書簡はタイプされたもので、署名はないが、メリノール修道女会の総長からであった。From Thomas A. Connolly, Archbishop of Seattle to Most Rev. Amleto G. Cicognani, D.D., July 27, 1954. 同上。

64 From Thomas A. Connolly, Archbishop of Seattle to Most Rev. Raymond A. Lane, July 6, 1953. 日系人対象のエスニック教会の将来性は薄いという合意事項に関しては、From Thomas A. Connolly, Archbishop of Seattle to Most Rev. Amleto G. Cicognani, D.D., July 27, 1954. 同上。

メリノール修道女会が神父から指示がなかったという情報には、総長は深く心を痛めた。日系人活動の拠点を他の用途に転用することに関しては、残念なことではあるが、その必要性の高さを認め、「我々はそれを妨げるべきではない」と伝えた<sup>65</sup>。

### 結びにかえて

こうして、1953年12月31日をもって、OLQM 教会は活動を停止した。OLQM 教会の歴史を振り返ると、教会は日系人に特化して、日系人のために幼稚園や学校を運営し、日系人の社会的必要に応えた。日本語で行われるミサ等の宗教活動は、信者に、宗教的充足感を与えたであろう。白人の聖職者と一緒にいることで、主流社会に仲間入りしたかのような満足感があったろう。その一方で、仲間という安心感と連帯感が育まれた。とはいえ、日系人だけの教会とカトリックの普遍精神とは、矛盾するようにも思われる。とくにアメリカ社会では、マイノリティの集団が、自発的であれ、人種隔離されていることでもある。人種差別と表裏一体である。戦前期においては、日系人が、かりに英語を話すことができ、日本語の宗教儀式を欲さなかったとしても、主流社会のカトリック教会信者からは歓迎されなかったであろう。英語のできるフィリピン系人が同じ東洋人だとして OLQM 教会に組み入れられたことから、人種偏見と差別の壁が、フィリピン系人を主流社会の教会から排除していたことを示している。しかし、同じ東洋人のマイノリティ集団といっても、本国の軋轢を反映し、フィリピン系、中国系、日系は、連帯できなかった。戦後のアジア系の人びとの居住地区の拡散で、OLQM 教会に集まる信徒数は激減し、一つの教会として存続できなくなった。しかし激減したことは、OLQM の元教区民が主流社会の教会へ加入できるようになったことの証明でもあった。OLQM

65 Most Rev. Raymond A. Lane, M.M., D.D., Superior General to Most Rev. Thomas A. Connolly, D.D., July 14, 1953. 同上。

の閉鎖は、一方で、アジア系アメリカ人の連帯意識が未成熟であったことを物語り、また別の意味では、アメリカ社会の人種統合の進展の証でもあった。OLQM 教会の建物は1976年解体された<sup>66</sup>。

メリノールの白人聖職者たちが、本来居住することのできないはずの強制収容所に居住し、曲がりなりにも教会のような場を持ち、ミサ等の宗教活動を行ったのは、信徒への司牧活動の継続のためであった。可能であったのは、信徒の厚い信頼があったからである。そこには日系人の牧師や僧侶をもち、宗教活動を継続し得るプロテスタントや仏教徒への対抗意識もあった。聖職者が日系人ではないというハンディは、逆に、収容所の外の主流世界とのパイプを持っていることも意味する。それは彼らの宣教活動の強みでもあった。日系人は、宗教面だけでなく、家族の釈放や進学・就職など個人的問題を解決するために、白人聖職者の「人脈」に期待し、聖職者はそれに応えたのである。日系人にとって、彼らの存在は、敵対的な外界から護ってくれるシールドであると同時に、主流社会へ導いてくれる安全なパイプであった。

OLQM 教会が設立され維持されたのも、白人聖職者が強制収容所に入ったのも、宣教活動のためであった。それは日系人社会が日系の聖職者をもたず、アメリカ社会に未同化で、人種差別されていた状況のみに存在し得た。しかし状況が変化する兆しをみせると、カトリック教会は、あるエスニック集団に特化した教会を維持するよりも、その集団を主流社会に同化させる道を選んだ。そして日系人の主流社会へのパイプ役を果たした。そのために、「異教徒」への宣教活動を目指した教会は空洞化し、活動を存続できなくなった。しかし一つの教会は閉鎖されたが、結果的には万民のための普遍教会という精神は生かされたといえるであろう。

本稿では強制収容所内におけるメリノールの宣教活動や日系人信者側の

---

66 *The Catholic Northwest Progress*, July 9, 1976.

心情に関しては、紙面の都合で割愛した。稿を改めたい。

